

千葉県成田市三里塚周辺地域の 社会的・文化的特性に関する実証的研究

特に「開拓・開発」と「人の移動」に着目して

村川庸子

1. はじめに

千葉県は、東京の後背地として、近代から現代にかけて、その地理的・地勢的条件ゆえの固有の発展を遂げてきた。これを成田市三里塚周辺にみるならば、享保以降の新田開発・明治維新後の東京の窮民対策としての牧の開発に始まり、第二次大戦後の御料牧場や軍用地の解放と入植、近年の国際空港開設に伴う開発と人口流入という3つの時期の、それぞれに特徴的な「開拓・開発」と「人の移動」の状況が見えてくる。いずれも「国家」主導で、しかも必ずしも地元民の内発的な要求と結びつかない（或いはこれに反する）形で採られた政策であり、その中に地元民や新来者が否応なく巻き込まれていった側面をもつ。本研究においては、特に成田市三里塚周辺を主たる対象に、最初の二つの波、即ち明治初年と第二次大戦後の二つの時期にしばって、この地域の「開拓・開発」の特徴と、その過程における「国家」と「民衆」の関係性を歴史的・現代的に捉えることを目的としている。

現在の地図や航空写真でも、それぞれの時期の開拓・開発の跡を随所に見ることができる。古い開拓地は御料牧場の周辺に入り込んだ谷地や街道

沿いに少しずつまとまった形で村落を形成し、戦後の開拓地は、農地の区画毎に家が一軒あるいは数軒ずつ置かれ、規模こそ小さいがアメリカ西部の農村地帯を見るようである。元々この辺りは、耕作に適さない土地が多かったようで、いずれの時代にも貧困と重労働の歴史が語られる。また、人の移動が繰り返される際に必ず見られるoldcomersとnewcomersの対立もあちこちにかいま見られる。そんな労苦の果てに手に入れた土地が空港建設で取り上げられることになったのである。空港問題を採り上げるのは本研究の目的ではないが、素人目にもこの問題の根底に、開拓した土地によせる人間の「思い」があったであろうことが想像される。

このような問題意識にたって、この度、新たな共同研究を立ち上げた。参加者は以下の通りである。神田文人（敬愛大学国際学部教授）、高澤美子（同学部教授）、高田洋子（同助教授）、村川庸子（同助教授）。これまで約1年にわたって、前半は主として関連文献の収集を、後半は来年度からの本格的な調査に向けて、現地での予備的な実態調査を併せて行った。始まったばかりの調査であるが、これまでに得た知見をまとめておきたい。尚、視点と参加者は少々異なるが、1993年度

日本生命財団研究助成を受けて行った共同研究「成田空港の功罪」が、本研究のきっかけとなった。先の研究を示唆して下さった、今は亡き菊地昌典先生に感謝の意を表したい。

2. 調査の進行状況

1997年度の共同研究では、まず文献収集を中心に問題の整理を行い、併せて現段階までに電話による数回の関係者との接触、並びに以下の通り3回の現地調査を行った。

第1回（10月26日）

鎌ヶ谷市郷土資料館及び周辺踏査
明治開拓に関する資料収集

第2回（11月29日）

成田市三里塚御料牧場記念館及び周辺踏査
戦後開拓に関する資料収集と関係者への面接

第3回（1月28日）

成田市三里塚御料牧場記念館及び周辺踏査
沖縄出身者に関する面接調査

3. 調査報告

第1回（1997年10月26日）

鎌ヶ谷市郷土資料館で開かれていた「北島秀朝旅宿看板と初富開墾関係資料展」を学芸員の立野晃氏の案内で見せていただき、その後、近くの初富稲荷神社や栗野村の馬牧と村の境の土手、豊作稲荷神社や開墾局仮役所跡、馬込めの土手などを案内していただいた。立野氏の説明と天下井恵『下総牧の開墾～初富開墾のあけぼの～』¹⁾からまとめた明治初年の初富地域の開拓の状況は以下の通りである。

明治初年の下総開拓は、規模においても実効面においても、東京府の窮民授産の中では最も重要な政策であった。明治2年、新政府は東京の窮民救済のため、小金牧、佐倉牧の開墾を決めた。²⁾初富は小金牧の中野牧にあたり、牧の周辺には野馬土手、野馬除土手と呼ばれた土手が築かれ、現在もいたるところにその名残が見られる。

享保以前までこの地域では新田開発が盛んで、牧が次第に減じていたが、幕末にかけて幕府は請地（受地とも書く）制度を設け、牧周辺の住民は村毎に草を刈り、薪をとり、山菜をとる代わりに安い年貢を納めるという形で、牧の管理に加わり、その面積を維持していた。従って、維新後新政府が、東京の窮民の入植を決めた時には、近隣の村々が既得権を主張することになり、このことが開拓の行方を大きく歪めていくことになった。

明治2年3月、新政府は行政官達で小金牧の開墾と窮民の入植を決定する。開拓は政府主導で行われたが、民間の資金導入のために三井八郎衛門を総頭取に30余名の豪商を社員とする開墾会社を設立させ、政府から20万両を貸与するが、残りは、将来大地主になることができるということと交換条件に資金の提供を求めた。この事が後に大きな問題を生み出すことになるが、ともかく開墾会社は5月に結成され、13の開墾地（初富、二和、美咲、豊四季、五香、六実、七栄、八街、九美上、十倉、十余一、十余二、十余三で十余三が本研究の対象である三里塚に近い）に出張所を置き、代理人を開墾地の管理に当たさせた。この出張所の他に政府の仮役所も置かれるが、ここに詰めている役人には警察権と裁判権の一部も委ねられ、開墾会社は仮役所の下部組織としての機能を果たすという複雑な組織を作り上げた。

千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究

幕末、維新にかけて東京には多くの貧民が流入した。収入の不安定さから打ち壊しなど頻発し、新政府はその対応に苦慮していた。下総北部の広大な馬牧が注目されたのもそのためであった。東京府は次のような条件で入植者を募集している。

- ①入植後3年間の衣食住の面倒をみる、
- ②13~60歳の労働可能な者に一人当たり5反歩を与える、
- ③農業ができない場合も屋敷地として5畝歩を与える、
- ④開墾従事者に一日米5合、5~13歳の者に2.5合、4歳以下に2合を与える、
- ⑤病人には食物と薬を与える、
- ⑥自活能力のある者は、最初から地主になることができる、
- ⑦婦女子や体の弱い者には別の仕事を与える。

これに対し、府下から1,760戸、6,500名が応じた。

初富には10月27日を皮切りに計5回、312戸1,136名が入植し、南北2ヵ所の農舎に収容された。全開拓地の中心ということで仮役所が置かれ、開墾会社の社員として加太八兵衛、木村五左右衛門、湯浅七左衛門が任命された。二つの農舎の真ん中には初富稻荷神社が置かれた。

入植は当初から困難を極めた。元々開発の難しかった土地であり、入植者も農業経験のない者が多かった。台風や干害など自然環境も厳しく、病人、死者、逃亡者が続出した。約束されていた諸援助も滞りがちとなり、開墾会社側では、当初見込んでいた土地が、請地を除くと予想外に少なかったことから、出資を見合わせ始めた。先述の通り、開墾会社側は小金、佐倉牧の4万町歩のすべてが手に入るものともくろんでいたが、実際には、地元民がそれまで年貢を払ってきた土地の権利を主張し、地元葛飾県も新政府に対し、地元民の要求をいれて彼らを牧の開墾に参加させるよう要求した。開墾会社が実際に受け取ったのは約1

万町歩に過ぎなかった。曲がりなりにも授産を目的としていた政府も、同年の不作、米価の高騰などによる不穏な空気に押され、「なりふりかまわず東京で困っている人間は何でもいいから送ってしまえというふうに変換」することになる。適正な人数よりも遙かに多くの人員を無計画に送り込む。この時期の東京府の政策を天下井は「とにかく東京を出ていってくれればいいんだという棄民、ブラジルでもどこでもいいんだという感じで棄民をしてしまう方向に急激に傾斜³⁾していったものと断じている。

明治5年、開墾局は廃止となり、5月、開墾会社も解散した。これは実は偽装解散で、入植者には、当初5反5畝歩の土地が与えられたが、それ以上の土地は旧開墾会社の社員の所有となり、すべての援助が打ち切られた。私有地制の確立という政府の方針をいち早く察知した社員が、すでに地券の交付を受けており、実際の開墾にあたった農民との間で、訴訟係争が相次ぐことになる。初富では明治8年から13年にかけて裁判が行われ、13年に東京高等裁判所が農民側の主張を退け、時の県令船越衛の仲介で県が争議地の一部を買い上げ、安価に農民に払い下げて、係争は終了した。この後、留まっていた開墾者も次々この地を離れ、一方で近隣の村々から人々が入植した。

明治初年の下総開拓については、天下井は「地元の要求や援助を切りすてて、東京の町人や旧武士の窮民ばかり、さらにすすめようとした矛盾が次々とひろがっていった⁴⁾」と指摘する。更に北原糸子が、明治政府が旧武士層の授産のみを目的として計画したものを、東京府がその意志を越えて経済的窮民、即ち一般民衆までを対象として利用したこと、当時の日本が未だ本源的蓄積の前期に

あり、農民層分解が都市への流入、熟練労働者化には向かわず、開墾農民化に向かったという二つの特徴を指摘している。⁵⁾

第 2 回 (11月29日) & 第 3 回 (1月28日) 調査

第 2 回の調査は成田市三里塚御料牧場記念館で成田市教育委員会の社会教育指導員新島新吾氏に、特に沖縄県出身者の明治以降と戦後開拓の概況を、上江洲智昭氏 (三里塚在住) に体験談をうかがった。その後、周辺の踏査を行った。第 3 回調査では、新島氏に更にお話をうかがい、併せて今後の調査方針と方法について話し合い、協力を依頼した。こちらも、特に戦後に絞って、その開拓の状況を報告しておく。

昭和20年11月9日、「緊急開拓事業実施要綱」が閣議決定事項として承認された。戦後開拓史の幕開けである。冒頭に「終戦後の食料事情及び復員に伴う新農村建設の要請に即応し、大規模な開墾、干拓及び土地改良事業を実施し、以て食糧の自給化を図ると共に、離職せる工具、軍人、その他の者の帰農を促進」という方針がうたわれた。戦時下の鉱工業部門の壊滅的状況と逼迫した食糧事情、軍人や帰国が予想される引揚者の受け入れを可能にするのは農業開拓のみと考えられた。しかもことは緊急を要していた。

千葉県もこのような国の方針を受けて、戦後開拓が積極的に行われた県の一つである。その中に、遠山村 (現成田市) 三里塚の御料牧場に入植した沖縄出身者がいた。敗戦後、日本から切り離されてアメリカの占領下に置かれた沖縄には、自由な出入りができなくなった。沖縄出身の海外引揚者、復員者、戦災者は帰る故郷を失い、引揚者

収容所や知人宅に身を寄せていた。開戦直後にハワイから帰国していた浄土真宗西本願寺派の開教師与世盛智郎が中心となり、沖縄協会⁶⁾の協力を得て、県民の生活の安定を目指し、開拓に乗り出した。

昭和21年3月16日、下総御料牧場天浪第一地区が解放され、翌22年12月、下総開拓農業協同組合を結成、幾多の労苦を重ねながらも昭和30年頃には営農もほぼ軌道にのってきた、と伝えられる。生活も漸く安定しかけた昭和41年4月、突然新たな問題が文字どおりふってわいた。政府による新国際空港を成田市三里塚御料牧場内と隣接の開拓地に建設するとの閣議決定がこれである。反対運動も空しく、彼らは再び安住の地を追われていくことになった。

今回の調査でお目にかかった上江洲氏は、「開拓の父」と呼ばれる与世盛師の甥にあたり、復員後、東京で御料牧場への入植に奔走する叔父の姿を見、またこの地の開拓の最初から参加してきた人物である。「天皇陛下」の土地がいずれ解放される、それが「デモクラシー」だという叔父の言葉をいぶかしい思いで聞いたことなど、語ってくれた。

デモクラシーという言葉も知らなかったんですよ。その時初めて。…それでも信じないんですよ。叔父さんの考えはね、今に海外から沖縄の連中が引き揚げてきたらどこで収容するんだと、どこで受け皿をするかというような話、しとったんですよ。

買い出しと物々交換で食いつなぎながら、東京都内の軍用地、群馬県の草津、相模原市など入植の候補地を見て回り、一方で宮内省に御料牧場解

千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究

放を求める運動を続けた。その後この土地は千葉県に移管され、昭和21年2月1日付けで、千葉県知事小野哲名で、沖縄協会長宛に富里村に百町歩を割り当てるとの通知書が届いた。

昭和21年3月、20名の先発隊が入植した。米を少々持参してはいるが、金銭はほとんどなく、牧場の馬房で生活した。千葉県からの入植許可をもっていたとはいえ、既にそこには地元から無許可で入り込んだ人々がいた。「あの頃ね、もう警察でも手に負えないんだもの。無法地帯だから。

(我々が)行ったらもう喧嘩しようじゃないか、という意気込みなんですよ。」どちらの側も生存がかかっていた。相手の側も引くに引けない状態であったのだろう。当時の緊張感が想像される。だが、沖縄の人々は早手回しに御料地の解放を自ら求め、正式な許可を得ていたということは評価されるべきであろう。更に、この時、与世盛師のハワイ時代の知人であり、進駐軍にいた人物が助け船をだしてくれた。彼は直接開拓地に出むき、「ここは沖縄の人に与えられた土地だから、あなた方は出ていかなきゃ。沖縄の人にはマッカーサーの指令で、厚生省に対して沖縄の人に衣食住を与えろという指令が出ているんだよ。」と話してくれた。当時、「マッカーサーの指令」と言えば、何より効果的な「印籠」であったようである。その後、家族が、そして知人が、少しずつを頼って入植し、また御料牧場も段階的に解放されていった。耕作には適さない土地が多かったようで、竹林を小さな区画に分けて、土と根を手で分けていった。煙管の火や薪の火を乗せても熱くないほど手が荒れて硬くなったという。昭和20年代の中盤から後半は、オガミと呼ばれる、ネイティブアメリカンのテピーに似た、「寝ている布

団に雪が積もる」というような粗末な円錐形の小屋に住んだ、と苦しかった生活が語られる。

生活の苦しさは想像を絶するものがあったようだが、一方で、彼らの逞しさや知的な高さも強く印象に残った。

第二回の調査の日、新島氏は、一冊のアルバムを用意して下さった。空港建設による立ち退きの折、天浪地区の沖縄県人全戸に配布されたアルバムである。新島氏の義父新島盛喜氏が発案し、その指示に従って新島氏自身が撮影して歩いたもので、昭和41年3月の入植20周年記念事業として企画、2年の歳月をかけて作成したものである。表紙裏に「アルバム作業を終わって」と題する新島盛喜氏の一文が貼り付けられている。42年4月1日の第一回委員会で作成方針が決められている。

1. 家族写真 出来るだけ全家族をいれること。
2. 入植以来20年生活の根拠となった住宅をいれること。
3. 各自農業経営の特徴をいれること。
4. 三里塚附近の景色及び組合行事のスナップをいれること。

結果として、文化人類学の調査のような、方針のはっきりした、生活感をしっかり捉えた一冊。従って我々にとっては非常に情報量の多い一冊写真集となっている。

20周年記念事業がそのまま別れのための事業となった。空港開設と立ち退きが既に冷静に受けとめられている様子で「終戦後裸一貫で入植して働いてきたお互いの足跡を刻み込んでくれた因縁深い、この大地が急激な時代の波と共に変貌することになりましたが、幸いこのアルバムには盛沢山の思い出が永久に保存されています。どうぞ、時

には其の扉を開いて、ありし日を偲び明日への希望に向って逞しく進んで行きたいと願っています。」と結ばれている。

今一つ、印象に残ったのが、沖縄出身の方々が自らも誇りとし、周囲からも評価されているという子弟の教育水準の高さである。元々、入植者の中には農業経験者が少なく、教育者が多かった。入植以来の延入植戸数36戸の下総開拓農業協同組合の中で、元教員の入植者8名、入植後或いは其の子弟で成田市などで教職に従事した者7名、昭和47年現在教職にある者7名である。「子弟の教育には全力を注ぎ、資力と学力の及ぶ限り上級学校への進学に努め」公私立大学卒業者は31名、在学者7名、高校卒業生48名となっている。⁷⁾アメリカの日系移民が異口同音に、金銭や物は奪われることがあるが、身につけた教育は外から奪うことができない、食べるものを食べなくても子供の教育に力を尽くした、と語るのと重なって見えた。実際に「奪われた」経験のある人々ならではの言葉であろう。

三里塚に入植した沖縄県出身者の事例については、もう一つ付言しておかなければならないことがある。彼らの多くが、戦前戦中に日本本土や満州、ハワイ、北米、南米や南洋群島といった海外での生活の体験を持っているということである。沖縄は戦前から本土や海外出稼者の多いことで知られている。戦前の移民—敗戦—米軍の占領—戦後開拓—成田空港建設、この日本の近現代史の流れを縦糸に、各場面における「国家」と「個人」の緊張関係を横糸に紡ぎ出せたら、と考えている。

一体、この人たちは、「国家」と自らの関係をどのように捉えているのだろうか。最後に上江洲

氏の言葉を引用させていただく。

おれはもう本当は国に対しては本当に腹たつとる。国に兵隊に引っ張られて、そうして海兵団出るときには、なにがしかの旅費はくれるんですよ。そして海兵団の門から出たら、はい、さようなら。沖縄には帰られないですよ。もちろん船もない。どこへ行けばいいんだよ。…東京まで来て叔父さんに会えたからなんだけどね。職もないから、やっと入植して、落ちついた時に、今度は、おまえら、飛行場つくるから出ていけ、でしょう。何かしら国にかき回されているみたいでね。こっちから飛行場つくって、って勧誘したわけじゃないんだよな。「造るからお前ら出ていけ」でしょう。国のやることは腹たつてしようがなかったんだけどね……。

戦前は差別に苦しみ、国策に近い形で移民や植民として海外に赴き、戦争に巻き込まれ、戦争が終わって帰ろうとした沖縄は日本から切り離されて米軍の占領下、それでも三里塚に入植して落ち着いたと思ったら空港建設と、聞いているだけでも切ない思いがしてならない。それでも言葉は最後には過去形で結ばれ、微妙な、それでも穏やかな微笑みがひどく印象的であった。

最初に述べた通り、本研究は数年の準備期間を置いて昨夏開始されたばかりである。成田地域に近いところで勤務している地の利を活かして今後の資料収集、調査を進めていきたい。特に戦後の開拓については、いずれ彼らの追跡調査をと考えている。

注

- 1) 天下井恵『下総牧の開墾～初富開墾のあけぼの～』（鎌ヶ谷郷土資料館、平成2年11月22日）
- 2) 牧は軍事や輸送目的から馬を養育するためにもうけられたもので、1872年（明治5年）まで、房総に小金の五牧、佐倉七牧、嶺岡の五牧が運営されていた。
- 3) 前掲天下井、7頁。
- 4) 前掲天下井、19～21頁。
- 5) 北原糸子「明治初期窮民授産史——都市窮民対策の展開——」『三井文庫論叢』第9号、1975、108～109頁。
- 6) 当時、沖縄出身の疎開者は九州に4万6千人余り、南方からの引揚者や復員兵士も次々帰還しており、その援護のために組織された。比嘉春潮『沖縄の歳月 自伝的回想から』（中央公論社、昭和44年）、206頁。
- 7) 山里昌英、他「下総開拓の歩み」千葉県戦後開拓史編集委員会『千葉県戦後開拓史』（千葉県、昭和49年）、135頁。